

道徳科における探究力を育むカリキュラム・デザイン

～道徳的価値に関する体験をとおして～

糸我 直人

道徳科において他教科・他領域、日常生活などの体験とつなげて考えたり、自分と友達の感じ方や考え方を比べたりしながら多面的・多角的に自己のよりよい生き方について追究する探究力を育むためのカリキュラム・デザインの在り方について考察した。道徳科において『命について考えよう』という単元テーマを設定し、総合的な学習の時間、国語、理科、特活等の他教科・他領域と関連させながら、特に道徳的価値に関する体験を生かした総合単元型のカリキュラム・デザインを行うことで道徳的な実践意欲と態度を育むことができると考えた。

総合的な学習の時間における道徳的価値に関する体験的な学びが道徳科の資料がつながり、よりよい自己の生き方について考えを深めることに効果があったといえる。また、学んだ知識が、活用・発揮されるためには、活用・発揮を促す学習環境の整備が大切であることがわかった。

キーワード：カリキュラム・デザイン、総合単元型、体験、活用・発揮

1. 研究の目的

本校では、研究主題を「未来に生きて働く資質・能力の育成」とし、研究副題を「探究力を育むカリキュラム・マネジメント」と設定している。これをうけ道徳科における探究力を「他教科・他領域、日常生活などの体験とつなげて考えたり、自分と友達の感じ方や考え方を比べたりしながら多面的・多角的に自己のよりよい生き方について追究する資質・能力」と考えている。

田村（2018）は、「深い学びとは、知識をネットワーク化して構造化したり、パターン化して身体化したりして高度化することであり、そのためには、知識を活用・発揮することが重要である」と述べている。

1時間単位の道徳の授業では、その授業で学んだ道徳的価値や道徳的な実践意欲が活用・発揮される機会が少なく、汎用的な力となるためにも、学んだ知識が活用・発揮されるようにカリキュラムをデザインすることが大切である。

また、小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（2017）第4章「指導計画作成上の配慮事項」にも「自然体験活動等の道徳性を養うための体験活動と道徳科の指導の時期や内容との関連を考慮」とあり、道徳的価値に関する体験活動を取り入れることが大切である。

そこで、他教科・他領域、日常生活などの体験とつなげて考えたり、自分と友達の感じ方や考え方を比べたりしながら多面的・多角的に自己のよりよい生き方について追究する探究力を育むために、学んだことが活用・発揮され、道徳的価値に関する体験

を生かした総合単元型のカリキュラム・デザインの在り方について考えていきたい。

そこで、以下を研究仮説とした

研究仮説

道徳的価値に関する体験を生かした総合単元型のカリキュラム・デザインを行うことで道徳的な実践意欲と態度を育むことができるであろう。

2. 研究方法

2. 1. 道徳的価値に関する体験を生かした

総合単元型のカリキュラム

2. 1. 1. 単元づくりについて

道徳科における探究的な学びのイメージを図1のように考える。

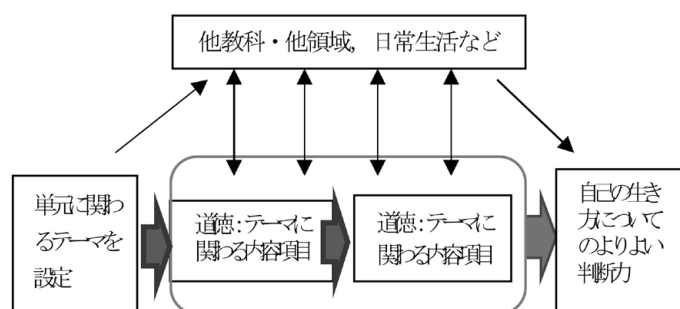


図1 探究的な学びのイメージ

本学級の子どもたちは、生き物が好きな子どもが多く、休み時間に昆虫を取りに行き遊んでいたり教室で昆虫やメダカを飼ったりしている。しかしその一方で、生き物を飼うことに対する責任感やどんな生き物も命あるものとして見る目が十分でないと感じられた。そこで、改めて子どもたちの中にある生命に対する考えを見つめ直し、生命あるものを大切にしていこうとする力を育てていきたいと考え、単元テーマを「命について考えよう」に設定して、単元構成を行った(図2)。

道徳科においては、「生命尊重」と「善悪の判断、自律、自由と責任」の内容項目を扱った教材を関連させて単元を組む。「生命尊重」の内容項目では、全ての命が尊く大切なものであること「善悪の判断、自律、自由と責任」では、生命尊重の立場から、よいと思うことを進んで行う判断力を育てることができると考えた。

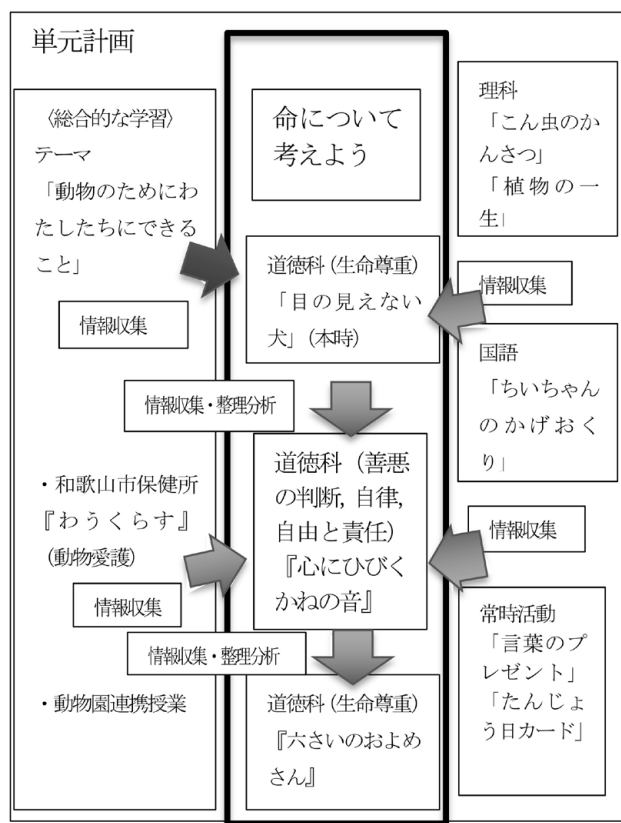


図2 単元計画

2. 1. 2. 総合的な学習の時間とのつながり

本実践で関連させる総合的な学習の時間の単元を以下のように設定した。

- ①和歌山市保健所主催の「わうくらす(Wakayama Animal Welfare CLASSの略)」での体験活動
- ②環境学習アドバイザーによる動物園連携授業

動物をととして命の大切さや他者とのかわりを学ぶことによって、子どもたちの豊かな心を育むことを目的に実施している動物愛護啓発事業である「わうくらす」(全4回)や動物園連携授業(全2回)などの体験と関連させた単元づくりを行うことで自分の体験と重ね合わせながら考えようとする姿が期待できると考えた。

2. 1. 3. 他教科とのつながり

○理科「こん虫のかんさつ」「植物の一生」

理科において得た動物や植物が生きているという実感を持った知識が活用され、道徳科の問題解決の情報収集のプロセスを充実させたいと考えた。

○国語「ちいちゃんのかげおくり」

「ちいちゃんのかげおくり」の内容の読解をととして気づいた「命の尊さ」や「命が失われることの悲しさ」にかかわる知識が活用され、道徳科の問題解決の情報収集のプロセスを充実させたいと考えた。

2. 1. 4. 特別活動とのつながり

○常時活動「言葉のプレゼント」「誕生日カード」

「言葉のプレゼント」は、係の子がくじなどで一人を指名し、その子に対してみんなから一言いいところなどを伝える取り組みである。

「誕生日カード」は、誕生日を迎える子どもにみんながメッセージ(お手紙)を書き、1冊にまとめて手渡す取り組みである。

上記2つの活動をととして育まれた命を授かっていることへの感謝の気持ち、命ある自己を大切にする気持ち、命ある友達の良さを見つけ認め合う他者への思いやりの気持ちが道徳科の問題解決の情報収集のプロセスを充実させると考えた。

2. 2. 活用・発揮を促す学習環境の整備

命についての学習を深めるため、また学んだ知識が活用・発揮されるように命や動物愛護に関する本の読み聞かせやコーナー(図3)を設けた。また、他教科での学びが道徳科においても関連づけて考えられるために、これまでの学習の足跡を掲示した(図4)。



図3 命や動物愛護に関する本のコーナー



図4 単元を通した教室掲示

3. 授業の実際と考察

3. 1. 総合的な学習の時間「動物のためにわたしたちができること」

3. 1. 1. 和歌山市保健所主催の「わうくらす」での体験活動

第1回『犬との接し方』

「わうくらす」では、市の保健所の方から、犬の能力や習性、犬の気持ち、犬との接し方などについて学んだ。犬と友達になる方法（飼い主さんに挨拶し、犬に触ってよいかを尋ねる。手をグーにして犬ににおいをかいでもらうなど）を学び、ボランティアさんが連れてきた犬と実際に触れ合った（図5）。



図5 「わうくらす」での体験

第2回『生き物を飼うこと』

市の保健所の方から、生き物を飼うということは、命をあずかること、最後までお世話をする責任をもたなければならないこと、そして生き物の幸せは、飼い主にかかっていることを学んだ。

第3回『野良犬・捨て犬について』

野良犬・捨て犬の現状（引き取りがない犬が殺処分されることなど）や、なぜ野良犬・捨て犬がいるのか、野良犬などを減らすためにはどうすべきかの話を聞いた。

（子どもたちの感想）

- ・犬を飼ったら、最後まで飼わないといけないと思う。
- ・犬の命は、人の命と同じだから捨てられる犬をなくしたい。
- ・もし自分が犬だったらとてもいいです。

第4回『命を感じる』

聴診器を使って、犬の心臓の音や自分たちの心臓の音を聞き、命の音を感じる体験をした。

上記のような活動をとおして生き物を飼うということは命を預かることを学び、また犬の心音を聞いて生きているという命を感じることができた。

3. 1. 2. 環境学習アドバイザーによる動物園連携授業

第1回「お世話になっている動物探し」

自分はどんな動物とどんなつながりがあるかを考えることで、自分たちと生き物のつながりや、他の生き物に支えられていることを学んだ。

（子どもたちの感想）

- ・動物の命を食べているので、とても動物に感謝して食べないといけないと思います。
- ・給食やお弁当を残さず、食べたいです。

第2回「動物の気持ちになって動物をよーく観察しよう」

和歌山城公園動物園で動物の気持ちになって自分が観察したい動物のしぐさや特徴をしっかり観察した。自分とはちがう能力をもち、違う世界を感じていること、環境との関わりで生きていることを学んだ。（図6）。

上記のような動物園連携授業をとおして、動物との関わりや動物の気持ちになって考えること、命の大切さを学ぶことができた。



図6 動物園での観察

3. 2. 道徳科『目の見えない犬』(生命の尊重)

の実践より

本時では、「わたし」が団地の決まりを変えてまで、目の見えない犬を飼おうとしたのはなぜか」を考えることをとおして、自分の命がたくさんの支えの中にあることを知り、命あるもの全てを大切にしようとする心情を養いたいと考えた。

授業では、「わうくらす」での自分の体験と重ね合わせながら考えようとする姿が見られた。(下線部の発言)

また、「もし自分が犬の立場だったら・・・」と相手の立場に立って、自分事として考える発言も見られた(波線部の発言)。

教師：なぜ、きまりを変えてまで飼おうとしたのかな。

あけみ：捨て犬で目が見えないので飼ってあげないとかわいそう。道を歩いていたらひかれるから、飼ってあげたほうがいい。

ひろし：殺処分されるから。

ゆうき：自分が目が見えなくてせまいところにいて、食べれなかったらいやだから助けてあげたい。

ゆり：ほっておいたら、愛護センターにひきとられて、運がよかったら新しい飼い主にひきとってもらえるけど、目の見えない犬だからよけいにひきとってもらえず殺処分されるから。

教師：でも、きまりをかえてまで飼っているの？

はる：どうしても助けたいという思いがある。

教師：どうしてそこまで思うの。

りょう：助けないと死んでしまう。

単元をとおした学習と関連させやすくした環境により、学びをつなげようとする子どもの姿が見られた(下線部の発言)。

教師：自分の命はだれに支えられているのかな？

ゆうこ：おばあちゃん。

こうじ：家族、ずっと『命のまつり』みたいにつながっている。

(命に関する本のコーナーから本を取り出し紹介しながら説明した)

たろう：食べ物を作っている人。

3. 3. 単元のまとめ

道徳科の単元の始めに、子どもたちに「命」のイメージのアンケートをとった。すると「命は一つしかない」「動くことができる」「大切なもの」と答えていた。これらのイメージは、総合的な学習の時間における学びによるものであった。しかし、本実践の道徳科単元の終末には、「命」に対する子どもたちのイメージが「支えられている命」「命は一つしかないこと」「かけがえのない命」「大切なもの」「命を大切にしながら生きていくこと」「動物の命、友達の命、自分の命を大切にしたい」のように変化し、多面的な考えをもてるようになっていた。これは、道徳科において3つの教材を「命について考えよう」のテーマで1単元として構成し、総合的に学んできた成果であると感じている。

4. 成果と課題

道徳的価値に関する体験活動を取り入れることで、より子どもたちが自分事として道徳的価値について考えることができた。総合的な学習における体験的な学びが、道徳科の資料とつながり、よりよい自己の生き方について考えを深めることに効果があったといえる。そして、学習環境が体験や学んだことを深め、活用・発揮することに大きく作用したといえる。

しかし、一方でカリキュラム・デザインした中で、活用・発揮が出にくかったところもあった。活用・発揮ができるように意図的・計画的な道徳科におけるカリキュラム・デザインを考えていきたい。

引用文献

文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」, P75

田村 学(2018)「深い学び」, 東洋館出版社, P83

参考文献

田沼 茂紀(2016)「小・中学校道徳科アクティブ・ラーニングの授業展開」, 東洋館出版社